入選

# 竹は竹、私は私

丸山　ゆかり　　静岡県富士市　　三十八歳

「シュッ、シュッ、シュッ！」

竹を削る匠の音。清爽な青竹の香り。優しい笑顔。それが幼稚園以降、帰宅した私へのお出迎えだった。

竹細工職人の祖父は、精緻な絵柄を丹念に竹に彫り入れ、花器を創った。

小学生まで私は毎日のように隣家の幼馴染と遊んでいたが、彼女が名門中学に進むと段々疎遠になった。新築した綺麗な家から可愛い制服を着て、通学する幼馴染を見る度、嫉妬心を煽られ、思春期の過敏な心に翳が差した。祖父は薄々察したのだろう。

「竹は剛もせず柔もせず、草でも木でもない。竹は竹だ。ユカならきっと竹のようにしなやかで強く、多彩な魅力を持った人になれる。ユカは、ユカだ。ユカはじいちゃんのたった一人の大事なかぐや姫だからな」

青々しい竹の香りがする、一節足りない中指の掌で祖父は私の頭を愛しげに撫でた。指先は遠い昔、戦争で奪われた。戦禍を生き抜いた壮絶な人生を物語る、竹の節のような年輪を刻む厳めしい指が幼心にも尊く見えた。

時が流れ、祖父が逝った後、私は竹の如く積雪の重みにも屈しない強靭さと、嵐にも折れない可撓性を志し、夢に向かって努力した。

竹は竹、私は私。隣の芝生は青く見える。…でも、慣れ親しんだ自分の庭が一番居心地がいい。そう思えるくらい大人になった頃、私は遂に夢を叶えた。

教師になった私は今日も教壇に立ち、世界に誇る日本最古の物語を生徒に教える。

「今は昔、竹取の翁という者ありけり……」